



OVERSEAS

Philippines —フィリピン共和国—

海外事情



フィリピン・ブトゥアン滞在記



野仲 真司 NONAKA Shinji
基礎地盤コンサルタンツ株式会社/本社/新エネルギー開発部

ミンダナオ島へ

2013年11月から2014年3月までの5ヶ月間、海外業務研修のためフィリピン共和国はミンダナオ島のブトゥアン市に滞在した。研修の前に何度か短期出張で訪れたことはあったが、ミンダナオ島は現在も紛争が続いている地域であり、長期滞在中に果たして大丈夫なのだろうか不安に思いながら現地に向かった。それでは、長期滞在中の出来事

を中心にブトゥアンについて紹介していこう。

ブトゥアンの地理とミンダナオの歴史

ブトゥアンはフィリピン共和国の最南にあるミンダナオ島の北東部に位置する。気候は熱帯に属し、年間を通じて最低気温23℃前後、最高気温は30℃前後と常夏ではあるが海に近いこともあり、東京の夏より

涼しく感じられた。3～9月位までが乾季、10～2月位までが雨季であるが、年間を通じて雨は多い。人口は3万人ほどだが、中心街は活気に溢れている。中心街から少し離れると田園風景が広がり、掘っ建て小屋が目につく。田園風景は日本の田舎を思い起こさせてくれるが、掘っ建て小屋で暮らす人々を見ると貧富の差を痛感せずにはいられない。

ミンダナオ島、特に西部ではフィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線との間で約40年前から紛争が続いており、一般市民が犠牲になることもある。そのため開発が遅れ、フィリピンの最貧困地となっている。そういう一面を持っているだけに長期出張は不安であった。帰国した2014年3月、両者は包括和平合意書に調印し、和平へ向けて進展した。

公用語

フィリピンの公用語はタガログ語と英語である。ただし、フィリピンは7,100以上の島からなり、島によって言語が少し異なる。その一例として、ブトゥアンでは主にビサヤ語が使われている。アメリカが統治し



写真1 ブトゥアン空港

ていた歴史があるため、ほとんどの人が英語を話すことができる。しかし、教育を受ける環境に違いがあるようで、英語のレベルにはかなり個人差がある。「Maayong Buntag」とはビサヤ語で「おはよう」を意味する。コミュニケーションの一環としてこの言葉を覚え、彼らと打ち解けるための糸口とした。

民族性

フィリピン人は陽気でおしゃべり好きが多く、勤務時間中も会話が絶えない。また、これは東南アジアのどこの国に行っても同じことだと思うが、時間にルーズである。仕事を頼んでもなかなか上がってこないこと

が多い。一方、朝は早く5時にもなれば車の行き交いが激しくなり、6時には人の往来も増える。小学校の始業も早く、7時には子供たちの登校が始まり8時には授業が始まるようだ。この地での生活は私に向いていると思ったが、この時間の流れに慣れてしまったら、日本に戻れなくなるのではないかと怖くなった。

移動手段

ブトゥアンには鉄道がなく、タクシーも走っていない。移動は公共の乗り物として、長距離バスかトライシクル、それとジープニーに限られる。トライシクルはタクシーの代わりといったもので、道で拾って目的地

まで8ペソ(約20円)で行くことができる。相乗りが基本のようだが、行き先が違ったりすると乗せてくれない。ひどい時はお客さんが乗っていないにも関わらず、目的地を告げるとそのまま走り出してしまふ。運転手の気分次第?で乗せてくれないこともあった。また、一定の金額を払えば貸し切ることが可能で、ピーチまで行ったこともあった。

ジープニーはタクシーと路線バスが合わさったような乗り物で、ジープニーの側面に書かれた通りだけ走るというシステムである。乗るときはタクシーのように手を上げて拾い、運転手に「ここで降ろして」と言えば、降ろしてくれる。天井が低く、車内を中腰で移動しなくてはならないのがしんどい。後方に座った際の支払い、前の人に運賃を渡すと、リレー方式によって運転席まで届けられる。お釣りがあつた場合は、運転手からリレーがスタートして手元に届く。

食べ物

ミンダナオ島は海に囲まれているだけあって海鮮料理がおいしい。中でもミンダナオの伝統料理である「キニラウ」は生マグロのぶつ切りと玉ネギ、きゅうり、生姜を酢と調味料で和えた料理で、お酒に合うので好んで食べた。それにマグロの刺身も楽しむことができる。

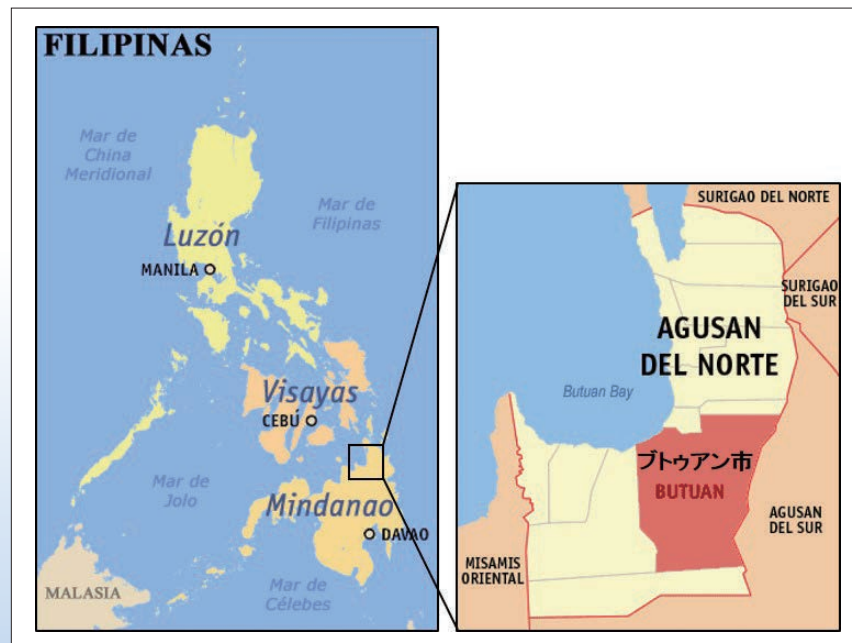


図1 ブトゥアンの位置図



写真2 トライシクル



写真3 ジープニー



写真4 キニラウ



写真5 夕焼けとMt. Hilong-hilong



写真6 マサオビーチにあるマゼランの銅像



写真7 ショッピングモール

果物はマンゴーやパイナップル、もちろんバナナもおいしい。バナナは日本で食べるものより少し青臭さがあるものの味は非常に濃厚で、これが本来のバナナの味なのだと感じた。研修で現場にいる時は、現地人がひょいひょいとヤシの木に登り、ココナッツを取ってきて、ココナッツジュースを振舞ってくれた。また、調理用のバナナ（青色）を蒸したものや自生する芋を甘く煮たものなども作ってくれた。これらはシンプルだが非常においしかった。

山と海

ブトゥアンの東方向には標高1,000m超の南北に連なる山脈が見える。面白いのはその最高点となる山の名前で「Hilong-hilong」と呼ばれており、「ilong」は鼻を意味し、その通り鼻が二つ並んだような山容をしている。

ブトゥアンは海岸にも面しており、市街からトライシクルで30分ほど行ったところにマサオと呼ばれるビーチがある。ビーチには大航海時代のポルトガルの航海者・探検家であるフェルディナンド・マゼランの石像があった。諸説あるようだが、ブトゥアンはマゼランが初めてフィリピンに上陸して、ミサを開いた地とされている。

開発が進むブトゥアン

研修前の短期出張で訪れたところと比べ、日本の自動車メーカーの大きな代理店ができたり、大規模なショッピングモールができたり、集合住宅を造成していたりと開発が進んでいる。

面白いのは、ショッピングモールの開店のタイミングだ。日本では通常すべての店舗が入って完成を待ってから開店するが、こちらではすべての店舗が入ってなくても、ある程度の店舗ができた時点で開店するという日本では考えられないやり方をとっている。これは、早く開店して少しでも償却期間を短くして、収益をプラスにしようという考えがあるようで、効率的だと感じた。

散髪

驚いたことに日本では4,000～6,000円のところ、こちらではたったの500円足らずで散髪してくれる。中に入るとスタイリストから雑誌を見せられて、フィリピンのセレブっぽい髪型を勧めて来たのでそれを選んだ。するといきなりバリカンで一気に刈り始めた。「おいおいマジかよ」と思ったが、ガンガン刈られていくのを見て観念するしかなかった。短くなった後でようやくハサミが登場したが、ほとんど微調整に使っただけだった。カット後に洗髪して、ヘアスタイルをセットしてもらった。

担当のスタイリストはいわゆる性

同一性障害を抱えた方であり、非常にユニークな方だった。フィリピンではこのような方はコミュニケーション能力が高いことから、サービス業に就くことが多いようだ。少し気に入られた感があったが、何事もなく店を出た。

休日の過ごし方

休日は、ショッピングモールに行ったり映画を観たり、カラオケやバーなどに行き楽しんで。

ショッピングモールに入るとここがブトゥアンだと忘れてしまうほど立派で、大型スーパー、レストラン、ファッションブランド、電気店、映画館、さらにはホテルが入っている。スーパーは日本と変わらないほど品物が多く、欲しい物が比較的簡単に手に入った。

映画は英語かタガログ語しかなく字幕も付かないので、正直なところ映像からストーリーを読み解くしかなかった。それでも、日本よりも早く海外の映画を300円ほどで観ることができるので非常にお得である。

市内には3つのカラオケ店があり、選べる曲は大半が洋楽である。日本の曲も入っている店舗もあるが、機種が韓国あるいは中国製のためか韓国語と中国語の曲のほうが多かった。曲のテンポとテロップのテンポが合わない曲が多く、歌うのに苦労する。同じ事務所で働く現地人に誘



写真8 クリスマスパーティーの様子



写真9 ブトゥアンの中心にある公園

われて何度か行く機会があったが、驚いた事にみな歌が上手だった。ビブラートが入り、コブシもあり、しゃくりも入る。今の日本の音楽業界でなら、すぐに歌手デビューできるのではないかと思った。そうやって感心していた矢先、請求書が手元に届き「あっ、なるほど。ここは俺が払うのね(笑)」となった。カラオケに行く度に請求書が手元に届いた。

お気に入りのバーが一軒あり、ここでは海外の輸入ビール（瓶）が日本より低価格で飲めるので、ビール好きには堪らない。初めて行ったときは、まさかこの地で海外のビールを飲めるとは思っていなかったので感動した。地元のビールは、サンミゲル・ピルセンとサンミゲル・ライトが主流であり、それぞれ30ペソ（70円）ほどで購入できる。

クリスマスパーティー

研修を受け入れてくれた地元の大手ゼネコン会社主催のクリスマスパーティーに招待された時、その規模に度肝を抜かれた。地方に散らばっている社員も呼び戻すようで、家族などの関係者も含めて総勢3,000名がホールに集結していた。ホールには立派なステージが用意さ

れ、3,000人分の料理とビールが準備される。

社長や役員が挨拶をした後、ステージ上で社員の余興が始まった。それが終わるとプロのバンド演奏に合わせ、ステージと客席の間にあるスペースで、ダンス会が始まった。その光景を座って見ていたところ、話をして女性に引っ張り出され、全くリズムに乗っていないダンスをステージで披露する羽目となった。夜7時から始まったこのパーティーは翌朝の5時まで続いた。

え！？誕生日って…

誕生日と言えば通常、誕生日を迎えた人が周りから祝福され、プレゼントを貰う日のはずだが、この地では誕生日を迎えた人が自らパーティーを開いて周りの人に食事やケーキを振舞う習慣のようだ。「なんじゃそれ」と思いつつ、不運にも滞在期間中に誕生日を迎えてしまった私は、隠していたはずの誕生日がどこからか漏れて、結局カラオケに十数名招待して、料理とビール代を含めた全額をご馳走する羽目になった。みんなすごく楽しんでくれたので、こんな誕生日もたまにはありかなと感じた。

バレンタインデー

これも日本人の感覚からしたら違和感を覚えるだろうが、バレンタインデーは男性が女性に贈り物をする日なのである。実はこれが世界的な常識で日本が異質なのだが…。そうとは知らず当日を迎えてしまった私は、何も準備できなかったのに対して、現地の男性はお世話になった女性に花やお菓子を贈っていた。この姿を目にして、フィリピン男子の心づかいに感心した。一方の私は「日本とシステムが違うので…」と苦しい言い訳をする他なかった。

プライベートでも交流を

当初は「5ヶ月間は長いな」と感じていたが、過ごしてみるとあっという間の出来事であった。いつしか紛争の心配も消え、そこで楽しむ自分がいた。長期で滞在したことで友達ができ、彼らと過ごすことで異文化に深く触れることができ、より良く彼らを知ることができた。業務で海外に行く際は、業務だけの付き合いだけでなく、プライベートでもその国の人と交流することが業務を遂行する上でも重要だという感想をもって終わりとしたい。